

死神親子

「這えば立て、立てば歩めの親心」なんてことを申しますが、どうやら死神の世界でも、親が子どもの成長を願う気持ちに変わりはないようです。

「おめえも今日から晴れて死神の仲間入りかあ。よだればっかりたらしってたあのちつちええ赤ん坊がなあ」

「父ちゃん、もう見送りはこの辺でいいよ。初仕事に遅れっちゃう」

「初仕事だからってあんまり固くなるんじゃないぞ？ 父ちゃんもなあ、初めてのお勤めじゃあ手が震えちまって、あの世までの地図が読めずに困ったもんよ。まあそもそももありゃあ地図が小さすぎたんだな。わざわざ紙を使うんじゃないもったいねえと思っただけ落ち葉の裏に道順を写してっただのが悪かった」

「知ってるよ。だから母ちゃんが大きな地図を持たせてくれた」

「お、おお、そうか。まあとにかく、緊張しすぎる必要はねえが、気を引き締めて頑張れよ」

「うん、わかった」

「なにが「うん、わかった」だ。大事な話を鼻ほじくりながら聞きやがって」「鼻がむずがゆいんだよ。この薄汚いお古を着てるせいかなあ」

「父ちゃんが使い込んだ仕事着を薄汚いお古とはなんだ。確かにあちこち破けて汚れちゃあいるが、まだ捨てるには惜しいだろう。それにこれくらい年季の入ってた方が迫力が出るってもんよ」

「ふーん。だからこの杖もこんなにぼろっちなんだね」

「ぼろっちなだなんて母ちゃんの前で言ってみろ。ぶん殴られるぞ？ これはな、母ちゃんのおとつあん、つまり、おまえのじいさんが使ってた由緒正しい代物なんだから」

「父ちゃんは使ってないのかい？」

「……父ちゃんは婿養子だからな。血筋が違うつてんで使わせてもらえねえのよ……。とにかく、これは貴重な商売道具であり、先祖伝来の家宝でもあるんだ。間違っても振り回して遊んだり、なくしたりするんじゃないぞ？」

「うん。わかった」

「この杖を片手にどっしり構えてさえいりゃあ、どうにか死神らしい恰好だけはつくからな」

「うん。わかった」

「こいつの「わかった」はどうもあてにならねえんだよなあ……。まあしかし、いつまでもこうしてくつちやべつても時間の無駄だ。さあ、行ってこい。忘れ物はねえだろうな？」

「あ！ 死人の名前が載ってる帳面を忘れてきちまった」

「初日からなにやらかしてんだよ、おめえは。しようがねえな。今日のところは父ちゃんのを貸してやるから」

「落ち葉でできてる帳面かい？」

「バカ言っちゃいけねえ。こいつはな、死神一人に一冊タダでちようだいできるんだ。こんな分厚い立派な帳面がタダだぞ？タダ！ 閻魔様ってのは太っ腹だよなあ」

「ありがとう。じゃあ父ちゃん、おいら、ちよいと行ってくる」

「おめえなあ、ひとつつきりしかねえ命を頂戴しにいくんだから、そんな「ちよいともよおしたんで用足しに」みてえな軽々しい言い方をするもんじゃあねえよ」

「うん。わかった」

「よし！ しつかりあの世へ送ってこいよ」

「うん、わかったー！ じゃあ父ちゃん！ 行ってきまーす！」

「杖を振り回すんじゃないぞねえってば！ はあく。遠足にでも行くような顔だねありゃ。あーあースキップしながら歌まで歌ってやがる。心配だなあ。……やつぱりちよいと見にいっとくか」

こうして過保護な父親がやってきたのが、とある貧乏長屋。そーつとのぞいてみると、血の気のない顔色をした青年が、うすつぺらい布団に寝かされています。

今にもあの世へ旅立とうとしているのは一目瞭然。そんな息子をなんとかこの世にとどめたい母親は、枕元に陣取って、紙のように真っ白な息子の顔をさすったりそつとたたいたり。

肝心の死神の方の息子は、布団の足もとでちんまり座つ動かない。

こつそり覗くだけと思っていた父親ですが、やはり黙っておれません。

「おい。……おいおい。こつちだよ、おいつてば！ ああ、ようやく気がつきやがった。……なにキヨロキヨロしてやがんだ。聞こえてねえのかな。おい！ おいおい！」

「父ちゃん。もう少し静かにしておくれよ」

「おめえがうんともすんとも答えねえから自然と声がでかくなるんだろうが。聞こえてんなら返事のひとつもよこしたらどうなんだよ」

「さつきからしきりに「おいおい」言ってるのは、甥っ子を呼んでいたんじゃないのかい？」

「なにをとぼけたことを言ってるやがるんだ」

「ひょつとして、今にも死にかかっているこのあんちゃんが父ちゃんの甥っ子かい？」

「いいか？ 人様に有り難がられこそしねえものの、おれたちだって一応は神様の端くれだ。その神様が人間と親戚同士だなんておかしな話があるわけねえだろう」

「なんだ。じゃあこのあんちゃんはおいらの伯父さんでわけじゃないんだね」
「待て待て待て。父ちゃんの甥っ子だったら、おまえにとっては「伯父さん」じゃねえ。「従弟」だろうよ」

「なるほどね。うん、わかった」

「ほんとにわかったんだらうな」

「おいらの伯父さんにしてはこのあんちゃん、ちよいと年が若すぎるもの」
「なんにもわかかってやしねえじゃねえか」

「ところで父ちゃん、なにしに来たんだい？ なんでもいいけど、おいらの初仕事の邪魔だけはしないでくれよ？」

「親の心子知らず」とはよく言ったもんだよ。その初仕事が無事に終わるか心配でこうして見に来てやったってのに」

「じゃあそこでおとなしく見てたらいいや。うーん。それにしてもこのあんちゃん、なかなか死んでくれないなあ」

「確かに固くなるなどは言ったが、おめえはちよいと緩みすぎなんだよ。自分がしくじってるとは思わねえのか。このあんちゃんが死なねえのはな、おまえの作法が間違ってるからだよ！」

「父ちゃん、おとなしくって言ったろう？ 従弟のあんちゃんが目を覚ましちまう」

「だからその「従弟」ってところからして間違いなんだよ！ 大体なんだってそんなところに座りこんでいやがるんだ。布団の足もととは治るかもしれねえ病人の時！ あの世に連れてく時は枕元に陣取るってのがお決まりなんだよ！ おめえ落語の「死神」聴いたことねえのか」

「だっておいらが来た時には、もうあのおつかさんに枕元の一等席をとられちゃってたんだもの」

「だったら二等席でも三等席でも構わねえじゃねえか。まさか一等席じゃなきゃいやだなんてわがままいうじゃねえだろうな。父ちゃん、おまえをそんな贅沢者に育てた覚えはねえぞ？ とにかくな、そんな末席で縮こまってちゃ仕事になりやしねえ。とつととお客さんの枕元へ……おいこら、大事な杖でなにしていやるんだ」

「背中を搔くのもだめなのかい？」

「家宝だって言ったろう。おれがめつたに触らせてももらえねえお宝になんてもったいねえことを……。いいから早く枕元に行くんだよ。あーあー、布団の端を踏むんじゃねえよ、中の綿がつぶれっちまうだろうが」

「もともとせんべい布団じゃないか」

「おめえがわざわざ薄焼きせんべいにしてやることはねえってんだよ。布団の寿命を縮めるのは俺たちの仕事じゃねえ。無駄にもつたいねえことをするな」

「布団の綿がつぶれるだの、もつたいないだの、父ちゃんはいちいち言うことが貧乏くさいね」

「うるせえな。母ちゃんの口癖なんて真似てる場合じゃねえだろう。ほらここだよ、ここここ！ そうだ。そうして枕元にどっしりと……正座するのか……」

おまえ妙なところだけ行儀がいいんだな。なんだか奉公したての丁稚坊主みてえだけどまあいいや。そんで杖をまつすぐに……ぐりぐり畳をほじくるなつつうんだ、目が傷むだろうよ」

「……あんたたち、ひよつとして死神かい？」

「ほらな？ こうして杖さえきちんと持ったときやあ、おめえみてえな涙たれの駆け出しだって、ちゃーんと死神に見えるんだから……つてちよつと待つとくれよ。あんた、おれたちが見えるのかい？」

「死神なのかい!？」

「はい、そうです。でもおいら今日が初仕事なもんで、いろいろどうぞお手柔らかに」

「その初仕事ってのはうちの子をあの世に連れてくことなんだろう？ なにが「お手柔らかに」だ。冗談じゃないよ。帰れ帰れ！ 帰っておくれ！」

「あ、そんなに塩を撒いたりしちゃあもつたいないよねえ、父ちゃん」

「倅の言う通りですよ、おかみさん。おれたちやナメクジじゃねえんで、そんなことなすってもせつかくの塩が無駄になるだけだ。撒いちまった塩はまな板の汚れ落としにでもお使いになるとして、まあここはひとつ落ち着いておくんなさい」

「大事な息子の命が取られようって時に、まな板の汚れを落としたり、落ち着いたりなんてしてられるもんですか！」

「なんともお気の毒とは思いますが」

「そう思うなら後生ですから、どうかお引き取り下さいまし」

「おいらも仕事とはいえ、従弟のあんちゃんをあの世送りにするのはちよいと気が引けるんだけど……」

「おめえちよつと黙ってる！ あのですね、おかみさん。人間にはそれぞれ寿命ってものが決まっております」

「そんなことはわかってますよ！ けどね、物事には順序ってものがあるでしょう？ 子どもの方が先立つなんて番狂わせはおかしいじゃないか。さつきから見るとあんたたち、どうやら親子のようだけど」

「へえ、恥ずかしながら一人息子の初仕事ぶりが気になって、こうしてついてきちまった次第で」

「その親ばかぶりを見込んでどうかお頼み申します。あなただってかわいいわが子にこんな物騒な仕事をさせるのは本意じゃあないでしょうに」

「そう言われましてもねえ、これがおれたちの家業なもんで」

「父ちゃんは婿養子なんだって」

「余計なことを言うんじゃないか」

「そりゃあ日ごろからさぞ肩身の狭い思いをなさっておいでのことでしょう。そんなお方にわがままを言うのは差し控えたいところですが、こつちだつてなにも百まで生かせなんて無理を頼もうってわけじゃない。まだまだ働き盛りのこの子が、無事に所帯を持って、子宝にも恵まれて、孫をあやししながら穏やかな隠居暮らしができるまでちよーつと見逃してくれたって、ばちはあたらないだろうってそう言ってるんじゃないですか」

「おとなしく聞いてりゃあとんだ厚かましいことを言い出したね、この人は。そんな贅沢言つちやあ充分バチが当たるだろうよ」

「こんなに頼み込んでるってのに、あんたそれでも人の親かい？ 血も涙もないのかい！」

「あいにく人の親でもなけりやあ、血も涙も持ち合わせちやいねえんで」

「じゃあこうしましょう。この子の代わりにあたしをあの世に連れてつとくれ。そうすりゃあ坊やだって、手ぶらで帰らずにすむだろう？」

「そうだね。うん、わかった」

「なにをわかつちやっつてんだよ！ 命の取り違えなんてことになったらおめえ、大目玉くらうことになるんだぞ？」

「閻魔様にかい？」

「とりあえず母ちゃんにだよ！」

「ごちやごちや言っつてないでとつとあたしを連れてお行きよ」

「あのね、おかみさん。しつこいようですが、寿命つてのは生まれた時からきつちり決まつちまつてるんで。ほれ、おまえちよいとあの帳面だしてみる」

「忘れてきちまつた」

「うん、おまえのはな。だからさつき父ちゃんのを貸してやつたろ。そうだ、そいつだよ。（帳面をめくり）えーつと……ほう、こりや大したもんだ。おかみさん、あんた百寿で大往生だよ」

「へえ。さぞぶつとくて長くいロウソクに命の灯が灯つてんだらうねえ」

「ああ、そうにちがいねえや。こいつはきつと、若くして死んだ息子の分まで思う存分人生を謳歌しろつて、そういう暗示じゃねえんですか？」

「こんなもの！こんなもの！ なにが百寿で大往生だよ！」（帳面を奪い取り、ビリビリ破く）

「あ！ おい、なにしやがる！ そいつはただの覚書だよ？ そんな紙吹雪をいくらこしらえたつて、寿命が延びたり縮んだりするわけじゃねえつてのに、ああ、もつたいねえ」

「もつたいないのはうちの子の命なんだよ！ わが子に先立たれて何十年も生きながらえたつてなんの楽しみがあるもんか」

「いくらそうごねられたつておたくの息子はもう命のロウソクの灯が……」

「消えかかつてつて言うんなら、あたしのみたいなぶつとくて長いロウソクに継いでくれたらいいじゃないか！ そうだ、思い出したよ。あんたら死神にはそういうことができるんだつたよね？」

「どこでそんな余計な知恵つけやがつたんだ」

「この間、寄席で聞いたんだよ。……そう言えば、あの囁の中には死神が消える

呪文をやつがあつたねえ。えーっと確か、アジャラカモクレン……」

「おいら知ってるよ。「アジャラカモクレン、テケレッツノパー」ってんだ」

「この馬鹿！ おめえ……！」

父親はあわてて息子の口をふさごうとしましたが、もう後の祭り。

キラリと目を光らせた人間の母親がすかさず叫んだ。

「アジャラカモクレン、テケレッツノパー！」

「はあゝ」

「そうしょんぼりするなよ父ちゃん。帳面だったらまた閻魔様に貰ったらいいじゃないか」

「タダで貰えるのは一人一冊と言つたらう。二冊目には再発行手数料つてのがかかるんだよ。それを考えたら閻魔様の腹の太さもそう大したこたあねえなあ」

「へえ、だったらおいらの帳面を貸してあげるよ。父ちゃん、無駄なおあしを払うのはなにより嫌だろう？」

「……帳面のことはさておき、おめえ、杖はどうしたんだよ」

「いけね！ 忘れてきちまった！」

「はあゝ。おめえはつくづく死神稼業にや向いてねえのかもしれないなあ」

「母ちゃんに怒られるかな？」

「怒られついでにどうだ、ひとつ商売替えてみる気はねえか。父ちゃんがーからみっちり仕込んでやるから」

「商売替えてなににだい？」

「父ちゃん、婿入りする前はなあ、貧乏神だったのよ」